

異文化間におけるコミュニケーション様式について

—異文化間語用論と配慮表現の観点から—

リナ・アリ (Lina Ali) (カイロ大学)

要 旨

本稿では、アラビア語⁽¹⁾に焦点を当て、日本語と比較しながら言語の背景にある文化がある個別言語において好まれる配慮表現⁽²⁾及び、配慮のメカニズムにどう反映されるのかを検討した。主に「依頼」、「謝罪」、「誘い」、「断り」の発話行為を取り上げ、調査をした。調査結果から、発話行為の種類が異なっても、アラビア語には低コンテクスト文化の特徴が多く見られ、「自己の負担が大きいと述べよ」(リナ 2016)、「明確に述べよ」(Lakoff 1973)の原則で配慮を示すことが多いことが分かった。一方、日本語は「言葉を短くまとめ」(Grice 1975)、ほのめかしのストラテジー(B&L1987)、「ポライトに述べよ」(Lakoff 1973)の原則で配慮を示す傾向があり、高コンテクスト文化の特徴が多いことが分かった。

キーワード：文化、コンテクスト、コミュニケーション様式、配慮表現、人間関係

1. 研究背景と目的

語用論に関わるポライトネスや、配慮表現、丁寧さなどが普遍的な概念ではなく、文化や価値観、社会的通念、コミュニケーション様式の差異に関わる異文化間語用論⁽³⁾と密接な関係にある。従って、日本語学習者に適切な発話が求められるには、まず教師が目標言語に見られる文化の特徴や、学習者の母語文化と目標言語の文化の違いなどに関する知識を十分に把握して学習者に提供することが必要不可欠である。従って、エジプト人日本語学習者の特徴や問題点を解明できるように、まず本稿では学習者の母語であるアラビア語と目標言語である日本語の両言語の背景にある文化の違いや、文化の違いを生み出すコミュニケーション様式の違いなどを明確にする。

2. 問題の所在と研究課題

従来の言語の対照研究では、二言語に見られる類似点及び相違点などについて研究なされてきたことが多いが、個別言語に見られる文化的差異について十分に考慮されてこなかった。つまり、個別言語の中でどのようなストラテジーが使用されるかに限定され、なぜこのように特定のストラテジーが好まれるのかが、根本的な原因が不明である。そこで、文化が日本語とアラビア語両言語において好まれる配慮表現及び、配慮のメカニズムにどう反映されるのかが明らかにすることを本稿の課題とする。

筆者は、日本語とアラビア語の断り発話に焦点を当て、様ざまな研究をしてきたが、本稿では、断り発話以外の発話行為（「依頼」、「謝罪」、「誘い」、「断り」）を取り上げて、異文化間語用論の観点から、主にアラビア語のコミュニケーション様式に焦点を当てて、両言語には果たして先行研究で指摘されるように「高コンテクスト言語」の特徴が見られるのかを明らかにする。具体的に、両言語では、どのように他者への配慮を示すのか、どのような配慮表現を用いるのか、そしてどのようなコミュニケーション様式を好むのかを質的に分析する。

3. 先行研究と本研究の位置づけ

Hall (1976) では、日本語とアラビアは同様の高コンテキスト言語と指摘され、その後 Hall の主張に従い、同じことを指摘した研究が多く見られる (アル・オマリ 2008、岡田 2006、Zahrana1995 など)。一方、リナ (2013a、2015a、2015b、2016) は日本語とアラビア語の断り発話に焦点を当て分析した結果、両言語の断りにおいて相手への配慮の示し方、また断り発話を正当化⁽⁴⁾するメカニズムが異なることを指摘した。従って、本稿では断り発話に限定せず、様々な発話行為において、日本語とアラビア語には同じような傾向が見られるかどうか検証する。

従来の先行研究では、「高コンテキスト文化・言語」と「低コンテキスト文化・言語」の定義について、以下のように指摘されている。

八島・久保 (2012) では、高コンテキスト文化・言語とは、状況に埋められた情報や、人々が前提として共有している知識への依存度が高いものであるのに対して、低コンテキスト文化・言語が明示的なシンボルによるメッセージへの依存度が高い。

石井・北山 (2004) によると、低コンテキスト文化では、言語によりコミュニケーションを図ろうとするため、言語に対して高い価値と積極的な姿勢を示し、コミュニケーションに関する諸能力 (論理的思考力、表現力、説明能力、交渉力など) が重視されると指摘している。つまり、高コンテキスト文化では、言語により、相手との人間関係が重視されるため、できる限り相手に結論を委ねた方が配慮の度合いが高い。

また、西田・グディカンスト (2002) では、言葉が使われる割合が少ないことを高コンテキスト言語、使われる割合が高いことを低コンテキスト言語と区別している。

本稿では、「高コンテキスト文化・言語」と「低コンテキスト文化・言語」を以下のように定義する。

高コンテキスト言語では、基本的に他者と共有されているものとして「情報」が位置付けられている。そこには、話者は正確に他者に情報を伝達する必要はなく、むしろコミュニケーションの受け手が文脈的な情報に注意を向け、そこから発話意図を察するべきであるという前提が隠されている。言い換えると、発話意図の伝達は聞き手の責任であると言っていいのではないかと思われる。

一方、低コンテキスト言語では、基本的に個人が所持しているものとして「情報」が位置付けられている。そこには、正確に他者に情報を伝達しない限り、それを他者と共有することはできない。つまり、発話意図の伝達は、発話者の責任であるという前提が隠されている。従って、低コンテキスト言語では、話し手がより多くの言葉を用いて、聞き手に気持ちよく発話を受け取ってもらえるように努力する必要がある。

このように、高コンテキスト文化と低コンテキスト文化の特徴を持つ話者同士の言語コミュニケーションには、違いが大きく、お互いの言語背景にある文化の特徴を把握しない限り、円滑的なコミュニケーションを図ることが困難であると考えられる。

筆者は (リナ 2016)、「文化とコンテキスト」と「コミュニケーション様式」の関連について、先行研究で挙げられているコミュニケーション様式を踏まえた上で、それぞれが高コンテキスト文化の特徴になるのか、低コンテキスト文化の特徴になるのかを分析して、以下の表 1 と表 2 のように分類してまとめてみた。

【表 1】 高コンテキストコミュニケーション様式

高コンテキストコミュニケーション に見られる様式の特徴	• 螺旋的スタイル
	• 間接的スタイル
	• 人間関係重視スタイル
	• 飛び石的スタイル
	• 高文脈型スタイル

表 1 では、高コンテキスト言語の特徴が見られるコミュニケーション様式として、5 つの様式にまとめたが、それらの共通点は、結論を聞き手に委ねることと言えよう。つまり、聞き手に発話意図を読み取る責任があるという前提が隠されている。一方、低コンテキスト言語の特徴が見られるコミュニケーション様式をまとめてみると以下の表 2 のようになる。

【表 2】 低コンテキストコミュニケーション様式

低コンテキストコミュニケーション に見られる様式の特徴	• 直線的スタイル
	• 石畳的スタイル
	• 低文脈型スタイル
	• 直接的スタイル
	• 情報重視スタイル

以上の表 2 の 5 つのコミュニケーション様式は、話し手に発話意図の伝達の責任があるという点で共通していると考えられる。また、言語の依存度が高いコミュニケーション様式であるため、高コンテキスト言語より、発話が長い点が特徴的である。

本稿では、これらの様式を用いて、調査データを分析する。

4. 調査情報

本稿では、8 つの「謝罪」、「依頼」、「誘い」、「断り」の発話行為について調査を行い、調査で得られた例文を取り上げて、質的に分析をする。具体的に、それぞれの発話行為におけるコミュニケーション様式、配慮表現、配慮のストラテジーを検証する。

4.1. 調査場面

4.1.1. 「謝罪」

- ①先生の本を借りて、不注意で本に水をこぼしてしまった
- ②授業に遅れて、先生に謝る

4.1.2. 「依頼」

- ①親しい友達に欠席したときの授業を説明してもらう
- ②引っ越しの手伝い

4.1.3. 「断り」

- ①誕生パーティーの誘いに対する断り

②一緒に買い物に行く誘いに対する断り

4.1.4. 「誘い」

①授業が終わったら、一緒に食事する誘い

②婚約式の誘い

4.2. 調査対象者

エジプトに住んでいる 10 名のエジプト方言アラビア語母語話者を対象に調査を行った。被調査者は、全員 20 代の社会人である。

4.3. 調査内容

2017 年 9 月～10 月にかけてアラビア語母語話者を対象に、自由記述のアンケート調査 (DCT) を実施した。調査内容は、以上で挙げた 8 つの場面を設定し、「謝罪」、「依頼」、「誘い」、「断り」各発話行為において被調査者がこのような場面に直面した場合を想像してもらい、どう答えるか、または相手に情報をどう伝達するかを書いてもらう。調査紙を回収した上で、フォローアップインタビュー調査を行った。被調査者に調査の解答用紙を提示して、なぜこのように書いてもらったかを確認して、被調査者の意図を確認した。

5. 調査結果と考察

5.1. (謝罪)

(1) .ana asfa bs w ana gaya elsobh kan fy hadsa akharetny.we eldonya kanet zahma gdan.

(すみませんが、今朝来る途中で事故があったので、遅れてしまった。また、すごく渋滞していました。)

(石畳的スタイル)

上記の発話例では、発話者が謝罪表現として「ana asfa」(すみません)を用いて、一回のみ謝罪を行った上で、その後なぜ遅れてきたかという「理由説明」について細かく言及し、自分の責任ではなく、事故や渋滞があったせいで遅れてきたと他者に納得を得ようとし、論理的に説明していることが分かる。それは、言葉を尽くして論理的に状況を説明する「石畳的」スタイルになる発話例である。日本語において、以上のような場面では責任回避より、自分の責任を認めた方が他者から納得が得られると考えられる。

(2) .maalsh ana asef bs ana sakna byeed gdan,w el sobh eldonya kant zahma awy.

(ごめんなさい。すみません。でも私はとても遠いところに住んでいて、今朝道もとても混んでいました。)

(石畳的スタイル)

上記例 (2) の「謝罪」の例文では、発話者は例 (1) のように、謝罪表現で発話を開始して、そして遅れて来た原因について詳しく言及している。「理由」を細かく提示して、「とても遠い」や「とても混んでいた」などのように発話者が自分の負担が大きくしていることが分かる。それは、(リナ 2016) で新たに提示したアラビア語の配慮の原則「自己の負担が大きいと述べよ。」が働いているのではないかと考えられる。エジプト人の特徴的である程度副詞表現「Gdan」「awy」(とても、非常に)を理由説明に付加することで、自分の事情を大きくして相手との人間関係を維持しようとする手段の 1 つである。つまり、相手に自分がどんなに大変な状況にあったかを大きくすればするほど、相手に許してもらって気持ち

ちよく受け取ってもらおうと考える。上記の謝罪発話は「情報重視スタイル」の典型的な例でもある。「情報重視スタイル」では、発話者は情報を重視しているため、論理的に説明を行い、理由や原因を細かくすることによって、他者との人間関係を良好に保とうとする。

5.2. (依頼)

(3) . maalsh mumkin atlob mnek haga? mumkin teshrahily elmohadra elfatet ashan knt ghayba w msh fahmaha khales.

(ごめんなさい。何かお願いしてもいい？ 前回の授業を説明してもらっていいですか。前回欠席していたので、授業内容が全く分かりません。)

(石畳的スタイル)

上記の例(3)に使われた謝罪表現「maalsh」は、エジプトで広く使われており、謝罪、慰め、不満の前置き、依頼の前置きなど発話機能が多数ある。上記の例では、依頼の前置き表現として使用され、発話者は相手にかかる負担度を軽減し、FTA 軽減機能を持つものと考えられる。そして、依頼内容に入る前に、依頼の前置き表現として疑問形の「mumkin atlob mnek haga?」(何かお願いしてもいい)という慣習化された表現が使われて、発話者が相手にかかる依頼の負担を軽減しようとし、これから依頼をするということを聞き手に想像してもらい、相手に断る余地を与えていると思われる。依頼内容を見てみると、依頼者がなぜこのような依頼をするのか言葉を尽くして細かく説明しているため「石畳的スタイル」のコミュニケーション様式になる。

5.3. (誘い)

(4) . ana khotobty yom elkhames elgay. lazem tygy taban.hastannaky.

(私の婚約式が今度の木曜日です。もちろん来ないと行けないんですよ。待ちますから。)

(直線的スタイル)

(5) . baad elmohadra hanruh kolna nakol bra.lazem tygy maana bgd .

(授業が終わったら、みんなで食事に行くんだけど、必ず一緒に来なきゃね。)

上記の例文のように、誘う側が相手に助動詞「lazem」の義務表現を用いて、誘う例がいくつかあった。「lazem」は、日本語の「～なければなりません、～ないといけない、～なきゃ」に相当する助動詞である。

リナ(2015a)では断り発話に焦点を当て、義務性を表す助動詞「lazem」(～なければなりません)は、どのように配慮表現として機能するかについて、次のように論じた。

断り発話の中では、自分の断りを正当化するのに、助動詞「lazem」を使用することにより、せっかく誘ってくれた相手のことを思いやって、今現在断らざるを得ない状況に置かれていることを想定させながら、相手から断りの了解や同調を得ようとするができるからだと考えられる。そのため、「ごめん、今から帰るんだ」より、「ごめん今から帰らなければならないんだ」の方が必然性が含意され、話し手は本来聞き手の要求に応えたいが、やむを得ずどうしても帰らなければならない事情に置かれているために断ってしまうことが相手も推測できるため、より丁寧になる。これは、情報重視コミュニケーション様式の特徴と考えられる。

Lakoff (1972:910) では、問題とされたお客さんにケーキを勧める言い方として、(may, should, must) の3つの助動詞が含まれる例文のうち、最も強制力を持つ(must)がより丁寧な言い方で、ポライトで

あることが指摘されている。それは、「相手が遠慮する心を持っていることを想定して、相手にとって良いことを勧めるには、強い勧めが相手に対しての思いやり、つまりポライトな配慮となる」(井出 2006:67)からである。従って、本稿でも、断り発話のみではなく上記の誘い発話においても、助動詞「lazem」は、対人関係を良好に保つという本来持つ高い義務性に加えて、配慮表現として機能する二次的用法を備えているのではないかと考えられる。従って、本稿ではアラビア語の誘い発話における助動詞「lazem」は配慮表現として認定できると考えられる。

5.4. (断り)

(6) . maalsh bgad kan nefsy agy, bs andy hagat kteer we mafrud aruh le arayby maa ahly.

(本当にごめんね。どうしても一緒に行きたかったのに。でも、用事がいろいろあって、家族と親戚のところにも行くべきだ。)

(石畳スタイル・情報重視スタイル)

上記の例では、発話者がまず「謝罪」で談話を開始して、「共感」を用いて、相手の誘いを受け入れたかったが、様々な「理由」で断らざるを得ない状況に置かれていることを説明した。つまり、石畳スタイルと情報重視スタイルのコミュニケーション様式で相手の誘いを断っていることが分かる。これに対して、日本語の「断り」発話として、以下のようなものが挙げられる。

(7). ごめん、今日はちょっと…。 (飛び石的スタイル)

(8). ごめん、金曜日バイトがさー。 (飛び石的スタイル)

(リナ 2016)

上記の発話例(7)は、食事の誘いに対する断りで、例(8)は誕生パーティーに対する断り発話である。断り手が状況を説明したが、はっきりと相手の要求に応えないことを言語化せず、応えられない状況にあることだけを言語化して、相手の推察力に頼り、非明示的に断っている。例(7)は、「飛び石的」スタイルの代表的な断り発話として挙げられる。日本人同士であれば、相手の発話はイコール断りであることがすぐに理解でき、話し手が「ちょっと」で断り発話を短く済ませ、相手から「行けない」という結論、または本意を理解してくれることを期待する表現方法であると思われる。これに対して、調査データからアラビア語の断りの中で、よく用いられる様式として、以下のような例文が挙げられる。

(9) . asfa msh ha'dar aruh ashan kharga maa babaya we hanzur had arebna. (リナ 2013)

(すみません。行くことができません。お父さんと一緒に出かけ、そして親戚を尋ねて行くから。)

(直線的スタイル)

上記の発話が結論で始まり、その結論のFTAを軽減するために、結論を裏付ける理由を論理的に説明し、異なる理由を重ねることにより、断り手が自分の断りを正当化しようとしている。それは、「直線的スタイル」の特徴である。

以上をまとめると、上記の例文に使われたアラビア語の配慮表現として次のようなものが考えられる。誘い発話の助動詞「lazem」(～なければなりません)、謝罪や依頼発話などの「maalsh」(ごめんね)、理由説明に用いられる程度副詞「kteer」「gdan」(たくさん、とても)、依頼発話に用いられる「mumkin」(～てもいい)などが挙げられる。

6. フォローアップインタビュー調査結果

本稿で行ったフォローアップインタビュー調査結果から、アラビア語において、話し手が強く事情を

表さなければ、聴者に誤解される恐れがあり、話し手が自分自身に情報伝達の責任があると考え、できる限り事情を細かく説明して、相手との人間関係を良好に保とうとしているという回答を得た。そして、誘い発話では、相手が遠慮していることを考えて、より強い表現を用いて誘った方が丁寧であるため、義務性表現を用いていることが分かった。それは、リナ (2016) は、日本語とアラビア語の断り発話について意識調査とフォローアップインタビュー調査を行った結果と同様の傾向である。要するに、アラビア語において、断り手は強く事情を表さなければ、聴者に誤解される恐れがあり、人間関係が損なわれる可能性が高いため、より細かく理由説明を行う必要があると言えよう。

7. 結論

以上から、発話行為の種類が異なっても、アラビア語において言葉が使われる割合が高いことが共通点として挙げられる。それは、「低コンテクスト言語」の典型的な特徴の1つである。また、発話者は依頼発話でも、断り発話でも、謝罪発話でも同様に状況説明を細かく行っていることが観察された。

従って、アラビア語において「情報重視スタイル」と「石畳的スタイル」が好まれ、「明確に述べよ」(Lakoff 1973)と、「自己の負担が大きいと述べよ」(リナ2016)の原則で配慮を示す。また、アラビア語では言葉を端折らないで、むしろ言葉を尽くして論理的に状況を説明する「石畳的」スタイルと「直線的」スタイル、「情報重視スタイル」が多用されることが分かった。一方、先行研究で指摘されるように、日本語において言葉が使われる割合が低く、状況説明は細かくされない傾向がある。それは、日本語では自分の意見や主張を明確に言語化しないで、聞き手に結論を委ねる「螺旋的」スタイルや「飛び石的」スタイルが好まれるからだと考えられる。例えば、Beebe et al. (1990) は、日本語母語話者と、アメリカ人英語母語話者、日本語を母語とする英語学習者を対象に、断り発話について対照研究を行った。そこで、意味公式の分類単位で断り発話を機能別に細かく分類した結果、両者が用いる「理由」において相違点が観察されたと言う。具体的には、日本語母語話者の断りの「理由」はアメリカ人と比べ具体的でないとして述べている。また、日本語を母語とする英語学習者の英語の断りについて、談話完成テストを行った結果、学習者の母語である日本語からの転移として、「理由」の曖昧性が挙げられている。それは、「日本語母語話者は、人間関係を重視し、「言葉を短くまとめ」(Grice1975)、ほのめかしのストラテジー(B&L1987)、ポライトに述べよ」(Lakoff 1973)の原則で配慮を示す(リナ2016)」からだと言えるのではないかと考えられる。

8. まとめと今後の課題

本稿では、アラビア語に焦点を当て、様々な発話行為を分析した結果、発話行為の種類を問わず、アラビア語は低コンテクスト言語の特徴を持つことが明らかとなった。つまり、アラビア語と日本語においてコンテクストが完成されるプロセスが異なる。

低コンテクスト言語では、話し手が提供する情報でコンテクストが完成される。一方、高コンテクスト言語では、話し手が提供する情報に加え、聞き手がその情報が含意されている内容(言語外の意味)を読み取ることにより、コンテクストが完成される(リナ2016)。

しかし、文化的差異を探ることにより、異なる言語の発話に現れる言語特徴を想定できるが、その文

化の特徴が絶対的なものではなく、相対的に傾向の違いを予想できるものである。言い換えると、本稿では様々な発話行為を設定したが、異なる場面では必ずしも同様の傾向が見られるとは限らない。場面内容や相手との人間関係、上下親疎関係などにより、表現の選択や配慮のストラテジーなどが左右されると考えられる。

本稿では、アラビア語に焦点を当て調査を行ったが、今後の課題として同様の調査を日本語母語話者を対象に行い、両言語を客観的に比較する。そして、両言語の違いを明らかにした上で、それがどのように、アラビア語母語とする日本語学習者に影響を与えるのかを検討したい。具体的に、本稿で明らかとなったアラビア語の文化背景とコミュニケーション様式の関係がどのように、アラビア語を母語とする日本語学習者に影響するのか、学習者に語用論的転移が生じているのかなどについて調査をして、学習者の問題点や学習者の特徴を明確にしたい。また、客観性を高めるため、談話完成テストに加え、自然発話を収集し、日本語とアラビア語の違いを明らかにしたい。

注

(1) 本稿で言うアラビア語は、エジプトの日常生活で使われているエジプト方言アラビア語のことであり、口語のアラビア語とも言われる。

(2) 配慮とは、「対人的コミュニケーションにおいて、相手との対人関係をなるべく良好に保つことに配慮して用いられる言語表現」である(山岡・牧原・小野 2010)とする。

(3) 異文化間語用論とは、異なる文化的背景を持つ言語使用者によって遂行される言語行為の研究であり、文化の違いが言語コミュニケーションにどのように反映するのかを語用論の枠組みを用いて研究する分野である(清水 2009)。

(4) 正当化とは、「他人の利益を奪うことになる断る行為によって生じる人間関係の損害を避けるためのストラテジーのことであり、具体的に断り手はどういったメカニズムによって、自分の行為を正当し、他者から納得が得られるのか」(リナ 2016)と定義する。

主な参考文献

- 石井敬子・北山忍(2004)「コミュニケーション様式と情報処理様式の対応関係：文化的視点による実証研究のレビュー」『社会心理学研究』19 日本社会心理学会 241-254
- 井出祥子(2006)『わかまへの語用論』大修館書店
- 岡田英夫(2006)『日本語教育能力検定試験に合格するための基礎知識 50』アルク
- オマリ, ジェハード・アル・森 和義訳編(2008)『アラブの文化とビジネス成功の極意』スピークマン書店
- 谷口龍子・榮谷温子(2011)「アラビア語のエジプト方言における詫びおよび感謝表現の語用論的機能」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』19 横浜国立大学留学生センター 29-38
- 西田ひろ子(2000)『異文化間コミュニケーション—人間の行動原理に基づいた—』創元社
- 西田司・グディカンスト, W. B.(2002)『異文化間コミュニケーション入門』丸善株式会社
- ザトラウスキー, ポリー(1993)『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』くろしお出版
- 八島智子・久保田真弓(2012)『異文化コミュニケーション論—グローバル・マインドとローカル・アフェクト—』松柏社
- 八代京子・町恵理子・小池浩子・吉田友子(2009)『異文化トレーニングポータル社会を生きる』三修社
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹(2010)『コミュニケーションと配慮表現 日本語語用論入門』明治書院
- 山岡政紀(2008)『発話機能論』くろしお出版

- リナ アリ (2013a) 「エジプト人大学生と日本人大学生の「依頼」、「勧誘」に対する「断り」の対照研究—ポライトネスと意味公式ストラテジーの観点から—」筑波大学人文社会科学国際地域研究専攻修士論文
- リナ アリ (2015a) 「断り発話における程度副詞について—配慮表現としての機能を中心に—」日本語用論学会 第17回『大会発表論文集』(Proceedings)10
- リナ アリ (2015b) 「エジプト方言アラビア語の断り発話に見られる配慮表現について—日本語と対照して—」『アラブ世界における日本研究の現状』カイロ大学日本語日本文学部紀要
- リナ アリ (2016) 「日本語とアラビア語の断り発話を正当化するメカニズムについて—異文化間語用論と配慮表現の観点から—」筑波大学人文社会科学国際日本研究専攻博士論文
- Brown, P., S. Levinson. (1987) *Politeness*. Cambridge: Cambridge University
- Grice, H. Paul. (1975) *Logic and conversation*. University of California Berkeley. 41-58.
- Hall, E. (1976) *Beyond culture*. New York: Doubleday
- Lakoff, Robin (1972). Language in context *Language* 48:907-927
- Lakoff, Robin. (1973). The Logic of Politeness; or, Minding Your P's and q's. In paper from the ninth regional meeting of the Chicago Linguistic Society (292-305). Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Leech, G. (1983) *Principles of Pragmatics*, Longman.
- Nelson, G., Al Batal, M., El Bakary, W (2002). Directness vs. Indirectness: Egyptian Arabic and US English Communication Style. *International Journal of Intercultural Relations* 26: 39-57.
- Nelson, G., Carson, J., Al Batal, M., El Bakary, W. (2002). Cross-Culture Pragmatics: Strategy Use in Egyptian Arabic and American English Refusals. *Applied Linguistics* 23/2: 163-189.
- Zahrana, R. S. (1995) Understanding Culture Preferences of Arab Communication Patterns. *Public Relations Review*, 21(3): 241-255

(リナ・アリ、Lina Ali、カイロ大学日本語日本文学部専任講師、linaali59@hotmail.com)